



大学と地域歴史文化：大阪市立大学日本史研究室の
取組み〈報告6〉（第3章 国公立大学フォーラム：
「地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学
：地域歴史遺産の保全・活用と防災」）

塚田，孝

(Citation)

地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備, 特別研究プロジェクト(平成23年度事業報告書):26-29

(Issue Date)

2012-03-31

(Resource Type)

research report

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003880>



いままで作成した DVD は、『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録 2005 年 5 月 21 日 〜22 日』、『新潟県中越沖地震被災地刈羽村民俗資料収蔵庫資料救出作業の記録 (2007 年 8 月 25 日)』、『新潟県中越沖地震被災地刈羽村民俗資料収蔵庫への民具返還プロジェクトの記録 (2008 年 5 月 10 日)』、『2010 年 9 月山古志への文書返還活動の記録 (2010 年 9 月 19-21 日)』である。これらの映像を見ると、2004 年中越地震・2007 年中越沖地震の文化財・歴史資料の救出・返還の取り組みがどのようなものであったのかがわかる。

2010 年には文化財・歴史資料の救出・返還の返還を終え、2011 年には復興のために、返還した文化財・歴史資料の活用の取り組みを始めた。2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こり、翌日には新潟県と長野県の県境で長野県北部地震が起こったため、東日本大震災・長野県北部地震被災地での文化財救済の取り組みへの支援も行った。

さらに、7 月末には、新潟・福島豪雨が起こったので、新潟県立歴史博物館が取り組んでいる水損史料の保全の取り組みにも協力している。

2-2 岩船郡平林村木村家文書の保全と活用

被災史料保全の取り組みだけではなく、新潟大学卒業生から寄贈を受けた史料の活用にも取り組んでいる。寄贈を受けた木村家文書は、新潟大学理学部物理学科の最初の卒業生で、のち名古屋大学工学部教授になられた木村初男氏所蔵史料である。史料の分量は文書箱で 90 箱、時代は 17 世紀から現代に及ぶ史料で、その中には関東大震災の際の東京帝国大学罹災者情報局が出した葉書もふくまれる。

木村家文書を活用して、原直史編『近世平林町と越後荒川の世界』（新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、2009 年、A 4、総 117 頁）と芳井研一『近代岩船郡と平林村木村家文書』（新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、2010 年、A 4、総 99 頁）の 2 冊の図録を作成している。

3. 地域文化を守り発展させるための課題

地域文化を守り発展させるための課題は、以下の 3 点である。第 1 点は、災害から文化財・歴史資料を守り、災害を研究することである。これは防災に貢献することにつながる。第 2 点は、地域の世代が交代するなかで失われる資料の保全である。これは地域文化の保全となる。第 3 点は、地域文化を保全するための文化財・歴史資料の収蔵庫を確保することである。文化財・歴史資料を収蔵する施設なくして地域文化は守れない。

報告⑥

大学と地域歴史文化

ー大阪市立大学日本史研究室の取り組みー

塚田 孝氏
(大阪市立大学文学部教授)

はじめに

本フォーラム冒頭で奥村弘氏が、地域歴史文化の危機は、自然災害による問題がクローズアップされているが、さらに広く深く地域社会の存立そのものの危機が進行している点

が深刻だと指摘されたことに強く共感する。

本報告では、大阪市大日本史研究室と和泉市教育委員会との連携事業について述べる。1993 年から継続して取り組んできたが、それが 2009 年 4 月の大阪市立大学と和泉市の包括連携協定につながった。その後は連携協定のもとでその内実を作り出している。大学の地域貢献である限り、教育に資するものであり、研究の発展につながるものであるべきだというスタンスは一貫している。

1、和泉市の地域史との関り

我々が和泉市と関わるきっかけとなったのが、同市内黒鳥町（近世の黒鳥村）内の史料の悉皆調査であった。これは、1980 年代始めに中世文書が含まれていたため注目された河野家文書のうち未整理であった近世文書の調査・整理を進めるべく文化庁の補助事業として実施されたものである。この時、河野家文書だけでなく、黒鳥村関係史料の全体的な調査として実施されたことは、膨大な浅井家文書の調査・整理にもつながった。その後の近世村単位で合同調査が実施されていく原点としても重要である。

2 年間の黒鳥村文書の調査が終了する頃、和泉市史編纂の話が持ち上がった。和泉市には 1960 年代に三浦圭一氏がほぼ独力で仕上げた内容的にも定評のある『和泉市史』全 2 巻があり、最初はその補遺をという話であったが、全面的な再編纂ならということで、日本史研究室のスタッフ（当時、栄原・仁木・塚田・広川）が編纂委員を引き受けた。

市史の編纂大綱を議論する過程で、①和泉市域での人々の「生活構築の歴史」を目指す、②（研究に基づく）市史づくりと史料調査・保存は車の両輪、ということを確認した。当初の計画段階では、巻別編成は時代ごとの本編 5 巻、資料編 10 巻と構想していた。資料編のうち 5 巻は史料群単位に地域別の編集を想定していた。その後、合同調査の進展や多様な機能を持つ市史紀要の編集の進展にしたがって、資料編 10 巻をやめ、地域叙述編 5 冊（横山・松尾・池田・信太・府中の 5 地域）、テーマ叙述編 3 冊、コンパクトな通史 1 冊の 9 巻構成に変更した。その意図は、①市域内の特徴ある地域に即した歴史展開に密着するため、地域叙述編を計画し、②資料編として想定していた史料の共有機能は、市史紀要のなかに吸収することにしたのである。

和泉市史の事業とも関わって、1977 年から日本史研究室と和泉市教委の合同調査を実施してきた。これは毎年、市内のほぼ町会単位（近世の村、近代の大字）で「地域の歴史的総合調査」を目標として、日本史研究室の教員・院生・学生だけでなく OB・OG も参加して、合宿形式で実施している（大阪市大日本史学専修 HP 参照）。これまで、15 回にわたって実施したが、近世の村単位の歴史を総合的に調査するという営みは、「地域史の思想と方法」を鍛えることにつながり、地域の持つ全体性に依拠して歴史学の全体性を回復する可能性に気づかせてくれた。一方、市史の編纂の面では、巻別構成の変更につながり、教育上も原史料に触れる又とない機会であるとともに、そこで発掘された史料を後期の講読や演習のテキストとして利用することで歴史の場を踏まえた地域史を学ぶ機会となっている。また、地域史認識という点では、合同調査は日本史研究室と和泉市教委との合同だけではなく、地域の人々との合同であるというふうに理解が深まったことが重要である。

2、地域史の模索と意味

ここまで簡単に和泉市域での地域史の取組みとその意味を述べてきた。以下では、地域

史として模索してきた内容を紹介し、地域史の意味に触れたい。

現在、先に触れた地域叙述編 5 冊のうち、3 冊が刊行されている。『横山と槇尾山の歴史』(2005 年)は、古代以来の一山寺院槇尾山(施福寺)の寺院社会の展開を横山谷村々の動向と関連させて叙述したものである。在地社会における寺院社会の展開を基軸に地域史を構想する機会となったが、槇尾山が深い山中に所在したことで即自的に山の問題が地域秩序を規定している側面が浮き彫りになった。

松尾谷には同じく古代以来の一山寺院松尾寺が所在していたが、近世以後は松尾寺とその門前が密着し、それ以外の谷内村々との関係が希薄になるため、『松尾谷の歴史と松尾寺』(2008 年)は、松尾寺の寺院社会の展開を一つの軸にするとともに、山と人々の生活をもう一つの軸として見ていくこととした。松尾谷は狭い谷であり、松尾寺の寺院社会の秩序が山の用益をめぐって形成されるとともに、松尾寺と谷内村々の関係、村と村の関係も山をめぐって形成されることに注目したのである。しかし、この段階では山の問題は水の問題でもあるという理解には達していなかった。

池田谷には槇尾山や松尾寺のような古代以来の寺院社会のような軸となる宗教施設は存在していなかった。『池田谷の歴史と開発』(2011 年)での基軸をどうするかは、議論を重ねた。池田谷は槇尾川が南から北に流れ、その左岸と右岸、右岸でも谷出口に当る池田下周辺と中流域、および谷奥の宮里周辺という 4 つの区域が地理的・社会的条件を異にし、それによって開発の進展が異なり、したがって村落社会の展開も異なった。こうした開発と村落社会の展開を主軸とし、古代以来の歴史展開が追える史料的条件に恵まれた池田下村の周辺の歴史叙述を副軸とすることにした。槇尾川の水を引けない耕地を灌漑するには山間の谷を堰き止めた溜池が必要であった。すなわち山はさまざまな用益の対象であると同時に水のために不可欠であった。こうして、村落社会の展開と《山と川と開発》に即して地域史を構想したのである。

こうした地域の特質に密着した地域史を模索することは、同時に《地域史の普遍性》を考えることではないかということ、マーレン・エーラスさん(現在:ノースカロライナ大学シャーロット校)の経験によって教えられた。ドイツのハンブルク大学で学んでいたエーラスさんは、学部生時代に交換留学生として大阪市大に留学し、日本近世史を専攻するようになったが、先に触れた合同調査にも何回か参加している。結局は、アメリカ・プリンストン大学で学位を取得するが、そのテーマは越前大野藩の城下町を中心とする貧民救済であった。そのテーマ選択は大学院時代の留学先が福井大学だったこともあったが、プリンストン大学時代の 2007 ~ 8 年の留学時には 1 年間大野に居住して研究した(福井・大野在住時にもほぼ毎週大阪市大の近世史ゼミに出席していた)。

そのエーラスさんは、地域史へと向かう経緯を《異質な〈日本〉への関心から出発して、諸事象を〈日本〉の「本質」に還元する危険を時代の文脈に即した理解(すなわち歴史学)で克服しようとし、それでも〈日本〉を出発点にしてしまう「国民主義的な枠」に拘束されない方向を「場所の文脈」(すなわち地域史)に見出そうとした》と説明しているが、その結果、「(越前)大野の歴史を日本史よりもさきに、人間または人類の歴史として考えるようにな」ったと言う(「地域史惣寄合に参加して」第 1 回地域史惣寄合報告集『地域史の現在』飯田市歴史研究所年報別冊、2010 年／「雪国留学」『クゴジリア』2008 年)。

地域史を〈我々=人類〉の歴史として捉え直していくことが重要なのではなかろうか。

おわりに

海外の研究者との共同の議論の場で痛感するのは、日本の近世史料は世界的に稀有な豊かさを持っているということである。そのことの意味を受け止め、地域史の可能性を模索し、地域歴史文化を守り育てていくことは、大学や文化行政の社会的責任と言えるのではなかろうか。

コメント（朝賀浩氏）と総合討論

司会（市澤哲）（神戸大学大学院人文学研究科）：第3部総合討論・コメントに入ります。最初に、全体の報告を受けてコメントをいただきます。本日は、文化庁文化財部美術学芸課文化財管理指導官の朝賀浩さんに来ていただいております。朝賀さん、コメントをよろしく願いいたします。

朝賀浩（文化庁文化財部美術学芸課）：文化庁文化財部美術学芸課管理指導官という立場ですが、今日私が招かれましたのはおそらく、今般の東日本大震災の被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）の担当ということがあるのだろーと思っております。

今日一日のお話を承りまして、一つは地震や津波といった大きな自然災害があつて、文化財が非常に困難な状況にあることは目に見える形でわかるわけですが、皆さんの活動具体的な内容をお聞きしていると、文化財の存在自身の不安定さというのは自然災害時に限ったことなく、日常的に歴史資料の保全を積極的にやらないと残せるものも失われてしまうという危機意識をお持ちなのだろうと聞いておりました。

ちょっとばかばかしいお話ですが、私が小学生の時に小松左京の『日本沈没』をテレビ番組でやっていました。そこに出てくる田所博士の「直観とイメージーション」というフレーズが非常に気に入っておりまして頭に残っているのですが、あの小説の中で、要するに、国土を失ってしまう日本人にとって、日本人としてのアイデンティティは何で保たれるのかということがテーマになります。その時に挙がってくるのが日本語（母国語）と形があるものとしての日本を伝えるもの（文化財）だと思うのですね。そういったことに奇しくも文化庁が関わって保護する・維持するということですので、「文化庁、ちゃんとしなきゃいかんぞ」と思います。

私は文化庁に来て三年目でして、それ以前は大阪市立美術館にいました。阪神・淡路大震災の時にも大阪にいました。あの時にうちの職員の大半が御影や岡本、六甲道などに住んでいて、職員が被災したことがありました。その後に文化庁に呼ばれ、いずれ関東でも大きい地震が起きるのだろーなと思ってはいたのですが、今回のように宮城沖であれだけの規模の地震が起きるということは全く想像しておりませんでした。

ここで文化庁としてのコメントということですが、ここはまだ個人的な意見です。要は、常に思うのですが、国が声高に「愛国心」というのは非常に問題があつて憚られることが多いのですが、地域で、健全な意味で「郷土意識」というか「郷土愛」というか。そういうものを育む取り組みが粘り強く行われていかないと、守るべきもの・何が大事であるかということも普及していかないと、伝わっていかないとことだと思ひます。主に若い世